

自閉症児のための治療保育的アプローチ

——音楽リズム療法——

石 川 正 明

An Approach to Therapeutic Nurture for Autistic Children

——A Musical Rhythm Therapy——

Masaaki ISHIKAWA

I 結 言

本論文は、自閉症児を対象として音楽リズム療法（以下、音り療法と称す）を行った。臨床的研究の報告である。音り療法という用語は私が始めて使用する言葉である。音楽リズムの技法を自閉症の療法として使用した根拠は、音楽リズムの内容が、音楽プラス動き（踊り）であるから、セラピーの技法として適しているという考えからである。音り療法を用いたもう一つの理由は、これを保育の現場に役立てたいということからである。つまり、幼稚園教諭、保育所保母ともに幼稚園教育要領ないし保育所保育指針に示されている音楽リズムを専門的に履修しているので、この技法を現場の自閉症の傾向の幼児に対する療法として用いることが可能である。今日、自閉の傾向の幼児は、幼稚園・保育園において十分な指導が極めて困難な状態である。このような現状に対して、この研究報告が、解決策への手引にいくらかでも役立つことができれば幸いである。

昭和58年、広島県内の幼稚園、保育所、施設（400ヶ所を対象にアンケート調査を行った結果、音楽療法を知らないという答えが、幼稚園関係で60%、施設関係は36%（保育所関係を含む）であった。音楽療法は意外に知られていないという実態が明らかとなった。

このように音楽療法は、絵画療法・運動療法・自然療法等と共に、最近脚光をあびてきた療法の一つであることができる。

日本における音楽療法研究者の一人である桜林仁氏は「音楽療法とは何かということについて、私は非常に大まかに、音楽による心理療法と、こういうふうに

いっておきたいのです。細かくはいろいろ問題があると思いますけれども、結局、音楽というものが持っている心理的な働きかけ、そういうものを生かして、人間の精神的・身体的健康を促進すると、考えていいんじゃないかと思うのです。……」¹⁾とのべている。つまり、音楽が人間にひき起こす心理的効果、価値を根拠として音楽療法に一つの意義を見出し音楽療法の可能性を期待するわけである。

私が音楽リズムを指導する過程で感じた事は、音楽リズムには音楽の3要素のリズムとは些かニュアンスの異なるリズムがあることである。つまり、動きのリズムがあるという事に注目したのである。

音楽を聞くと自然に手足が動くことは、誰しも経験することである。音楽の喜び楽しみは、歌うまた弾く、聞くなどによって味わうことは一般的であるが、それに遊びを伴う動きが加われば、楽しみ喜びが倍加される事実がある。その身体的な運動によって心のストレスが大きく発散し、心の健康につながることに着目したのである。体と心の関係は密接なつながりを持っている。したがって、身体的な動きのみでは成果が期待できない。つまり、〔歌＋うごき〕〔弾く＋うごき〕〔聞く＋うごき〕などの歌う弾く聞くなどの楽しみ、喜びの要素を取り入れてこそ効果があると確信する。幸いなことには、自閉児は音楽に対して並はずれた興味と音楽的能力を示すことが、自閉児に関する音楽療法の研究報告、医学的文献のほとんどに共通して述べられている。

自閉児の特徴として、きく・見るなどの反応は至って敏捷ではあるが、手足を使つての運動的な協応は個人差はあるものの全般的には鈍くにが手のようである。

なかには指の中でも特に親指の動きがきわめてスローのケースもある。この動きの特徴を少しでも改善するには音り療法による訓練（例えば指あそび、ピアノあそび等）はもっとも有効なアプローチである。

小関氏も、ダイナミックプレイと称して次のごとく述べている。「ダイナミックプレイとして行っている遊びは、すべて手や足を初めとし、からだ全体を用いながら、知覚・運動の機能的統合をはかるような遊びばかりである。このようにダイナミックプレイは、対人認知・対人関係を発達させるために、身体像、身体的部位のイメージアップを手足を用いた粗大運動によって、楽しい情緒的刺激を与えるようなやり方である」と。以上のように精神的にも身体的にもそれぞれ効用が期待できるが、更に、ラポートが成立し易いという特徴が見られる。つまり、自閉症児の基本的な障害の一つに対人的認知の障害がある。小関氏も「対人意識を志向する情緒の発達が非常に遅れており、対人意識のある他の発達障害児とは根本的に違っているのである。」³⁾と指摘しているように、対人意識・対人接触は外見上全くみられない。つまり、視線が合わないということ。一見、無視しているような状態がある。「おはよう」「今日は」というようなコミュニケーションが全くないという基本的な大きな障害がある。それを音り療法によって、少しでも人間的な情緒的関係の成立をはかるのが狙いである。つまり、音り療法によって、ラポートの設定と治療保育の2つを同時に可能にしていこうとするのである。「自閉症児には言語的コミュニケーションが出来ないので、その代りとなる音楽、つまり非言語的な音り療法を手段としてラポートをまず成立させるわけである。そして、音り療法によって、先に述べた精神的・身体的にかかわっていくプロセスを取った次第である。」療法の順序としては、先ずラポートを確立し、次第に、リーダーシップを取ることが治療保育の成立に必要である。

次に、音り療法の内容の説明にはいる。

それは、幼稚園教諭免許取得に必要な「保育内容の研究」の一つである音楽リズムが基本となる。音楽リズムを一口にいえば「のびのびとした表現活動を通して創造性を豊かにすること」⁴⁾その創造性を目標として、5つの表現活動の指導をするということである。その歌う、弾く等の具体的な活動内容については、今更あらためて説明するまでもないと思うので省略する。次に、臨床報告に入ることにする。

音り療法：1979年7月1日～1980年3月31日

クライアントの紹介（2人）

- ① U・M（男）S49年（1974）8月10日生（5歳）
父（会社員）母（主婦）妹
- ② N・F（男）S51年（1976）2月7日生（8歳）
父（会社員）母（主婦）弟（小学生）

Uは6月より、Nは少し遅れて私の治療教室を訪れ7月中旬から2人一緒にして音り療法を始める。私の教室に入る以前、Uは広島大学東雲分校特殊教育研究室で治療を受け、その当時広大に通いながら、なお私の教室に入ったという事である。

NもUと同様、その当時、広島市精神薄弱児育成会（情緒障害学級）に通いながら私の治療教室を訪れたのである。当時の特徴として、2人共不安定ではあるが、一応言葉もあり、私に対して問いかけらしき行動も見られ、又視線も合うという状態であり、私は、自閉症までにはいかない自閉症的傾向のラインにあると判断した。しかし、治療の過程において自閉症児特有の現象である特定の或る事物に対しての異常な執着と固執傾向は毎日のように表われるという状態であった。しかし、音り療法によって、その傾向もだんだんと薄れ、音り療法がきわめて効を奏したと考えている。

II 治療経過 1979年7月～1980年4月

1979年7月～9月

Uは、私を無視して数字のつくものばかりに興味を持つ。カレンダー、時計、テレビのチャンネル等である。この固執傾向は約10ヶ月位続く。又、一寸油断すると、ドアを閉めずすぐ屋上に勝手に出てしまう。しかし数ヶ月後は必ず自分でドアを閉める。この治療教室は自分を受容してくれる落ちつける場所だと認知したのではなからうか。しかし、こちらの言葉は全然通じない。

Nは、すぐに鏡を見て自分の姿をながめる。（表情を豊かにして）私が鏡の前の椅子に座ると、たまげるような悲鳴に近いキイキイ声で私をたたく。これが1ヶ月続く。

3週間後、部屋から見える「山一證券」のキャンペーンを見るとすぐに大きな声で「山一證券・山一證券」を連呼する。

Nがパニックをおこせば、私が「山一證券」と言えばすぐに機嫌がなおる。

Nの初回の印象は、理由なく突然に泣き出したこと

である。それは曲を聞いている時に!!

Uは、日曜日にセラピーをすると部屋に入ったとたん泣きだす。大きな声で「ゴルフ、ゴルフ」と大粒の涙を流して泣くのである。つまり、自宅に父親がいるので出たくなかったのである。

Uと父親のコミュニケーションがよくわかる!!

第1回(1979年10月15日)

Uはだいたいレコードの中の曲の順序を知っている。

Uは「どうぞ」という言葉あり(タンブリンを渡す時等)。

N, しきりにレコード, レコードと要求する。(Uが遅れてきたためである)

N, おもちゃ遊びの時には必ず鏡を見て手拍子で打つ。そのきっかけから, 次の曲も手拍子で打つようになる。ただし毎日というわけではない。

第2回(1979年10月20日)

本日はNが休み。

Uは「N君がいない」と言って少し淋しそうである。

Uは平素かけるレコードの曲の番号をすべて暗記している。おどろきである。つまり数字への固執である。「二人きりになったね」といつものように話しかける。帰る時「レコードさんさよなら」と呼びかけをする。

第3回(1979年10月25日)

U, 笑顔で入ってくる。まず, 聞く活動のレコード鑑賞に入る。

UはNに「どうぞ」といってタンブリンを渡す。

Uは音楽を無視しているかのごとく見うけられるけれど, 大体, 曲の順序を知っている。レコードを聞いている証拠である。

「おさるのかごや」がかかると, “ピョンピョン”を要求する。けれども近頃はロッキングチェアを要求する。この時ばかりは私の言葉をよく理解して反応する。近頃は, オペラ式で問答唱すれば, 意外と反応してくれる。

そしてUは固執傾向がある。ステレオのダイヤル(数字)を動かす!! 又, 音楽がかかるとUはドアをしめる。最近, 音り療法の指導の際は全部窓をしめて行う。効果あり。

N, 相も変わらず, 私の顔を見ると「山一証券」を連呼する。

最近, Nは, レコードをかけるよう要求する。特に

「赤いくつ」を好む。固執行動として「ままごと」遊びの音楽になると, すぐ鏡の前に立ち, 自分の顔を眺めつつ手拍子を打つ。最近, その次の曲でも手拍子を打つようになる。

Nは時々私の顔に自分の顔をすりつけるしぐさを示す。機嫌のよい時である。親愛の情を示しているようである。Nは音楽のムードにひたる瞬間がUよりも長い, 時々, ある曲「ままごと遊び」の時には手拍子を打って楽しむ傾向が強い。

※ピョンピョン……私と一緒に手を取りあって, スキップしながらグルグル円を描く動作である。

第4回(1979年10月29日)

N, 今日休み。

U, Nの休みのことを知っているようで, 一寸淋しそう。例によって母親に外に出てもらう。

私と二人きりになる。小さい声で「二人きりになった」とつぶやく。

レコード鑑賞に入る。曲を聞いていないような顔をしていても, その実ちゃんと注意力をもって聞いている。

次に, 弾く活動として, 今日はピアノを初めて両手で即興的に歌いながら, つまり弾きかたをするかのようなしぐさをしてみせる。今日は全般的に調子がよいようである。

最近, ロッキングチェアを喜ぶようになる。この時ばかりは何を指示しても受け答えをしてくれる。この時が治療する一番よいチャンスである。

第5回(1979年11月1日)

今日Nが休む。U, 今日は一人でも前回のようになり淋しそうではなかった。

レコード鑑賞は, 今日は曲を変えてみたので, 興味を示したようである。両手でピアノを弾くまねをする。ピアノの模擬演奏である。そのきっかけはよく知った曲がかかった時である。

今日はUとずいぶん話をした。Uはクイズに興味を示していることが今日わかったのである。つまり, 話の内容はクイズのことばかりである。ほんとうによく受け答えをした。この受け答えの中でクイズ以外のことを話して突然大きな声で「数字の歌を歌って下さい」と要求する。すぐにピアノを弾いてやると, いつまでも大きな声で歌った。これは成功した一つのパターンである。

今日は途中で少女A（7歳）と一緒にいったことがよかったと思う。つまり、普通児の混合保育の形態が効を奏したのかもしれない。

第6回（1979年11月5日）

二人揃ってくる。

N、今日は一人言を大きな声でよくしゃべる。「お月さんおやすみ」とか、学校で放送されたものを丸暗記をして一人言をしゃべるのである。例えば「そうじ5分前です」「きれいにていねいにそうじして下さい」とか……。

今日、レコード鑑賞の曲目を変えてみる。N、始めて聞く曲の中で淋しい曲にはやはり泣く。今日は2回共泣く。私がすぐ「山一證券」を連呼するとすぐ泣きやむ。

次にピアノでハ長調の音階を弾かす。Uは何回でも私のいうことを聞き、そして弾く。Nは二回きり、三回目は強烈にいやがる。

私がUの指を使って「むすんでひらいて」を弾く。静かに口をあけて、よだれを流しながら見ている。帰りぎわに「先生サヨウナラ」「レコードさんサヨウナラ」と挨拶する。これはレコードそのものに愛着・興味を覚えたのではないかと考えられる。

第7回（1979年11月8日）

この日、レコードを変えて、モーツアルトのシンフォニーをかけてみる。Nが拒否反応を示し、いつものレコードをかけてといったような表情で訴える。平素のレコードをかけると表情は笑顔になり満足そうである。

あとは、いつものパターンで別に取り立てて言うこともなく、この治療教室にくることをUは喜んでいることを母親から知らされ喜びを感じる。

第8回（1979年11月12日）

今日、N休む。U、今日Nが休みなのにあまり淋しそうでない。普通児A7歳少女がいるせいであろう。

今日のレコード鑑賞は動きを伴ったものを長く（15分位）つづけた。

Uは遊びの中で、鈴をAに「どうぞ」とはっきりいって渡した。そのあと、ロッキングチェアで例のごとく機嫌よく行う。

このロッキングチェア、ピョンピョンは私の治療教室のみで、家・保育所ではやらないという母親の言葉

である。母親によれば治療効果がではじめたということである。自我にめざめ始めてきたのでは—？ つまり行動にイライラが出たり、又ある時には落着いて行動するということである。ピアノは「むすんでひらいて」の「ミミレドレレミレド」まで弾けるようになる。

帰る時、私の靴を下駄箱より出してくれる。このとっさの行動に驚きと期待をおぼえる。

第9回（1979年11月15日）

今日は二人とも来る。Uは風邪気味で調子が悪い。

Uの調子の悪いという根拠は、①まず笑顔がなく、②アチチ（お灸の事）と言え泣き出す。調子のよい時は笑顔であり泣きもしない。又、調子の悪い時は「どうぞ」もなく相手に黙って「ボン」と物を投げつける。

今日、普通児Aと一緒に行く。

N、今日2回泣く。喜・怒・哀・楽の哀を表現したのであって、別に気にもとめない。この事はむしろ自己表現であって喜ばしい表現であると考ええる。

近頃、私に対して筋道の通った話しかけをするようになる。

Uのダイヤルの数字いじりが今日はなかった。よい傾向だ。

第10回（1979年11月19日）

N休み。

U、今日はUの妹と一緒にくる。

セラピーに入る前、妹と言ひ合いをして、Uは一寸したパニックを起こす。

その時点から「火事になる」といって泣く。その不機嫌状態が続く。今日、度々「火事になる」といって泣く。その意味はわからない。しかし「ピョンピョン」と「ロッキング」はうれしそうに行う。途中、私が怒るとピアノの片すみに逃げる。自閉症児特有の逃げかた。

カレンダーをさして「11月29日（木）は終り」と時々言う。調べてみると、29日（木）がセラピーの最終回となる事がわかった。今更の如く数字への異常な興味をもつことに驚く。

第11回（1979年11月22日）

今日は親との話し合いをする。

内容 ① 対人関係における変化について!!

- ② 日常生活習慣にみられる固執性の減少について!!
- ③ 音楽に対する好みの変化について!!
- ④ 睡眠時間の乱れと不機嫌の状態について!!

色々話ははずんだが、結論として、よい傾向になりつつあるとの事である。ほんとうに心からよかったと思う。

今日、2人揃ってくる。今はUは不機嫌と親が申し出る。しかし、私が見る所あまり不機嫌ではないと感じられる。

レコード鑑賞をAと一緒にやる。

U、ダイヤルを回す。久々にU、玩具遊びをする。

歌、4人で歌う。N、手拍子を打つ。珍しいことである。今日NはUがレコードが回っているのを止めようとするのをいけなという表情で阻止する。これは驚きで善悪の分別が出た事である。

又、Nの親の話であるが、昨夜夜中に弟をつれて便所に行き、その時、電燈をつけ、帰る時はきちんと電燈を消して寝た。という報告を涙で話された。親の気持ち察するにあまりあり!!

N、母親の顔をみると「みなさん、さようなら」「先生さようなら」という常同性があり、今日Nの親がわざと顔をみせなかった。しかし、顔をみせるとやはり「さようなら」の連発である。固執の常同性をあらためて見直す。

第12回 (1979年11月26日)

2人共来室。

今日、Nよく反応する。具体的には、ピアノに合わせてよく身体表現(手拍子)を行う。又、ピアノ活動で「むすんで」を一緒に弾いてやる。いやがらず私の手にまかせる。今日は、Nが私に話しかけた時、私からNにニコリ笑ってみせたのが効果があったようである。

U、今日、数字の歌によく反応する。又、両方とも「おへんじ」の歌でよく返事をする。この事、重大である。つまり「うた」を通して学校適応を培ったケースである。

第13回 (1979年12月3日)

2人そろって来る。

例によりレコード鑑賞を始める。そして次に私が積極的に色々リズムを使って手拍子で表現する。Uはそ

れに対して色々反応し、新しい反応を示す。ある曲の中の一部—これはクライマックスにあたる所である—その山まで到達するのを手拍子でクレッシェンドを表現したのである。曲はキングレコードの「いっすんぼうし」である。これは音楽的才能の発見である。

最近、Uは全く外に出ない。最初の頃はよく外に出たものである。しかし、Uの行動を強く強制すると、たまたまではあるが、外に出ることもある。

今日は音楽によって、Uと私が曲の山に対して感覚的・感情的に高められ、結びつけられ、生き生きとした感情の交流を感じ、深い喜びと充実感を体験する。音り療法に対して、今日は最も深い意味を感じるひとときを体験した。

N、ピアノに対してよく手拍子で反応する。今日一回のみ「山一証券」を発する。

第14回 (1979年12月6日)

二人共出席。

レコード鑑賞は、今日もUのためにキングレコードをかけてやる。やはり、前回と同様相当興味を持ち、ステレオの前にずっと座り、私の打つきまざまの手拍子のリズムを模倣しながら、又知っている所は声を出して歌う。音り療法の効果が出はじめたせいなのか。又Uはピアノの前に坐り「ソの下はファ、ファの下はミ、ミの下はレ」とはっきり言葉に出して弾く。これには驚いた。

今日、Uは相当普通児に近い反応を示した。

Nは私に対して機嫌を取る様なしぐさを時々表現する。つまり、ニヤニヤ笑いながら自分の手を私の顔にあててしゃべる。「今日はね、先生」という決ったパターンである。

ピアノに対しては、Nの方が手拍子でよく反応する。Uは時々歌う程度である。

第15回 (1979年12月10日)

今日N休む。今日のUは、レコード鑑賞は心なしか、つまり一人なのであまり熱が入らない様であった。もうキングレコードも飽きたのか?

しかし、時々声を出してははっきり歌う時の表情は嬉しそうである。音り療法の価値が感じられる一瞬である。今日Uの母親が、幼稚園で音楽によく反応する。つまり、音楽に大きな関心を示して行動するようになったと言って喜ぶ。

又、今日、例のピョンピョンはいかにも楽しそうに、

うなり声の様な声を出して喜んで行動する。最近ロッキングチェアはあまり好まなくなった。

ピアノはいつもの通りに弾く。私のピアノに対して、手を打つようにと言えば、短い時間ではあるが打つ。又、時々歌う。

第16回 (1979年12月13日)

今日2人揃う。木曜日はAと共に3人である。

U、今日もキングレコードの曲によく反応した。今日のリズム反応は前回より音楽的である。一回一回リズム打ちがうまくなる。今日は私の手拍子を見て模倣打ちをする。親も療法の効果が出たと喜んでいいる。

N、いつもと同じで、別に目立つ事もなし。しかしNは私との関係を、N自身から或る行動(笑顔・あまえ顔)を持って私にコンタクトを示す。いい傾向である。

第17回 (1979年12月17日)

2人共定刻に来る。レコード鑑賞、U相変わらずキングレコードに興味を持ち反応し続ける。歌も多くなり言葉も多くなる。喜ばしい傾向である。しかしNは、昔話の童謡にはあまり興味を持たない。その他、いつものパターンで変化なし。

Nの母親は喜ぶ。つまり、最近言葉を出す前に、一寸考えて出すような傾向になったと喜ぶ。思考という言葉がNに当てはまれば、私にとって最大の喜びであるがー?

第18回 (1979年12月20日)

N、休み。

U、一人、しかし淋しそうな顔ではない。そして、Nの休んでいることもよく理解している。U、一回一回の音り療法で普通児に近いような行動に成長・発展していくのが、毎回のセラピーでよくわかる。

具体的には、レコード鑑賞の時に「いっすんぼうし」の曲のクライマックスの時、鈴を手からはなし、私の手拍子をまね「ガンバッテ」と大きな声で叫びながら手拍子を打つ。

今日、レコード鑑賞の時に部屋中をとびまわりながら自由な身体表現をする。この表現は今回初めての行動であり、私のいうことを理解している様な自然な動きを感じさせた。

第19回 (1979年12月27日)

N、休み。

U、キングレコードの歌詞を読みながら、大きな声で鈴を嬉しそうに振りながら歌う。Uの指名する曲を弾いてやると、大きな声で一番から五番まで通して歌う。私のピアノに合せて歌うのは、今日が初めてである。

本当に最近、毎回ごとに治療の効果があるように思える。一回一回普通児の状態に近づくことが非常に嬉しい。大きな発展である。

第20回 (1980年1月7日)

N、休み。U、今日キングレコードではなく他の童謡を自分で指名して聞く。

今日びっくりした事は、メロディーを階名唱法で歌ったことである。それもある程度正しく歌うことである。そして、いつのまにか音感が入っていた事である。今日はどの曲も階名唱法で歌う。又、ピアノで色々な曲を弾くことには二度びっくりした。最近私の言うことを聞くようになった。つまり、聞き分けができた。今日は、はっきり「おめでとう」と頭を下げて私に新年の挨拶をした。

最近ピョンピョンをしなくなった。これは私が、させない様にしたのである。つまり、ピョンピョンの動きを続行する時間にも、私の体力的限界があるからである。

第21回 (1980年1月10日)

今日、2人でくる。

N、久しぶりか、私に親愛の情を示す度が深い。つまり自分の手で私の顔をなでながら話しかける。平素あまり私に対して無い行動である。

N、今日、手拍子で2回音楽表現する。依然として打つ回数少なし。

Uは相変わらず一人言をいいながら音楽を聞く。

今日からNは親指のみを使ってピアノを弾く様指導する。つまり、今日始めて母親より話を聞く。Nは平素あまり親指を使わないということである。ピアノによって親指を使う様に練習させることにする。

第22回 (1980年1月14日)

N、休み。

今日、新しい行動が見られた。ピアノの指導の時に、私が「むすんでひらいて」のメロディーをオクターブ下で一緒に弾いてやると、次に自分一人でメロディーを両手でさぐりながら「むすんでひらいて」を弾く。

笑顔一杯で弾く様子には胸を打たれた。

第23回 (1980年1月17日)

U, 休み。Uの母親より電話あり、教室に来る途中、迷子になったが、しかしすぐ見つかったという事である。

今日、Nは始めからレコードをかけてくれと泣く。つまり私はUがまだ来ていないので、一緒に聞かせようとちょっと中断していた時である。今日は或るメロディー（音域高く、moll 調である。楽器は琴である）になると、たびたび泣きだす。反応が強い。

ピアノ遊びが親指で行えるようになる。前回あたりからNはお気に入りのレコードになると、家から持って来たあるパンフレットを離さず、レコード鑑賞の間中それを見ながら聞くのである。

第24回 (1980年1月24日)

U, 休み。N, 例の暗い曲を聞くと、U, Uと名前を呼びながら泣く。やはり、一人ではいつもより余計に悲しい状態に見受けられる。

今日も親指でピアノを弾かせる。

或る moll の曲で泣く事は、音楽に反応していることである。音楽に反応することは、マイナスではないことは確かである。今日、この状態（泣いている状態）の後、私がおぼろげと、力強く手拍子を打つとNもそれにつられて強く打った。この事は新しい反応である。

第25回 (1980年1月28日)

N, 休み。UはNがいなくても、あまり平素と変わらないが、その実、結果的に見ると反応があまりかばしくない所から、やっぱり淋しいのではないであろうか。「ピョンピョン」は相変わらず喜ぶ。しかし、私の体力がついていけない。

第26回 (1980年1月31日)

N, 休み。今日は非常に驚きの私であった。それは、私のピアノに合わせて、Uがドラムとシンバルを叩きながら「浦島太郎」「花咲爺さん」を歌った。シンバル・ドラムは私の指示ではない。自発的な行為である。ドラムとシンバルを交互に打つことも驚きであった。Uは心そこ音楽が好きなのであろうか。否、自閉児は本来音楽が好きであることを、私は確かに見たわけである。

第27回 (1980年2月4日)

2人揃う。今日、N久しぶりにあったので、いつもの様に非常に私に親愛の表情を示す。又、今日Nは言葉がいつもよりまともな会話があり、嬉しく思う。つまり、自分で大きな声で「手を洗う」そして洗った後、私が「手をよくふいたのか」と問えば「うん先生、よくふいたよ」とすばやく間を置かず答えるといったふうである。今まで、この様な会話がなかっただけに、一つの治療の効果があったと考えられる。

その話を母親に知らせると、ここ数日、家でもそのようだと嬉しそうに話す。

今日、U始めて教室で大便をする。いつもは必ず家で用をたして教室にくる習慣がついているのである。母親に知らされたことは、紙でふかず、手でふき、もて遊ぶという事である。これも自閉児の一つの特徴である。

第28回 (1980年2月7日)

2人揃う。今日Nがレコードの中にある鳥の声に非常に恐怖を覚えたのか、又きらいなのか、泣きながらレコードを自分で止める。しかし、すぐ平常の表情にかわる。（つまり曲目が変われば）

今日Uをつかまえながら、又おどかしながら（オープン・オープン）ステレオの前に強制的に坐らせた。これは学校適応のためである。

※オープンと言えば極度に恐れる。

Uが興味・関心を持つ対象物に示す時間的度合は、漸次変化し、子供自身が各回のセラピーごとに容容してくる。或る時は長く、又或る時は短かくという風に。同時にUの自発性・積極性・行動意欲が増加しつつある傾向が見られる。

第29回 (1980年2月8日)

Uは休み。今日、私が手拍子を打って、それをNにまねさせる。よくついてきた。ただ♪を早くすると、Nは早くできないので一寸いやがる。リズムは、♪、♪♪♪が意外にもよくできた。

今日、私が気づいたのは moll 調の曲で、特にバイオリンの高い方の音がすると、泣くことである。

その他、別にいつもと変わったことなし。

第30回 (1980年2月25日)

今日、Uは私に積極的にアタックしてくる。つまり、私に手をつなぐようにと意志表示して行動する。顔は

嬉しそうで元気そのものである。これが自閉症児であろうかと信じられない気持ちだ!!

今日もUはドラム、シンバルで反応する。これが2回目です。

今日、Nはよく泣く。何かの心理的影響なのかー？手拍子は二人共、私の手拍子をよく模倣する。

N、川の音・虫の声等のレコードに非常に恐怖の色を表わし泣き叫ぶ。「レコードを止めよ」という風に私に指示する。何故であろうか……今後の課題。

第31回 (1980年 2月28日)

N、休む。今日はAとU二人で行う。

今日の新発見はUが動きの活動が活発に、且つ積極的に出来るということだ。つまり、円のまわりを手拍子でAの後について歩き、又走る。それも、私の手を借りず一人で行動することである。次からは、これを大いに活かせば音楽リズムの活動そのもので、自閉症児に対する明るい展望がもてそうである。同時にNもこれに沿って行動を起してくれば大成功になる。

今日はA（普通児）と一緒に行ったことで成功したといえる。

又新しく発見したのは、本人が嬉しい時には私の顔を否、私の目をたびたび見るのが印象的であった。

第32回 (1980年 3月 7日)

N休み。UとAで音り療法を行う。

今日はUとAが互いに手を取りあって、輪に沿ってスキップ、ギャロップをする。相変わらずうれしそうな表情である。

今日、Uに聴音を指導する。正確におぼえている音、そうでない音もあるけれども、今後の聴音指導に期待がもてそうである。

手拍子の模倣はNのようにうまくやれない。

来週はト音記号の書き方を指導する予定。

第33回 (1980年 3月10日)

N休み。今日Uのセラピーでできず。原因はセラピーに来る途中、胸の「バッチ」を転んでこわした事である。今日は、そのショックが強いのか泣く時間が長い。その時の母と子のやりとりを見たが、子をなだめるのに理屈、理屈の一点ばかりでなだめるのは、どうしても理解の出来ないシーンであった。この母親にもカウンセリングが必要だと考えさせられる。

第34回 (1980年 3月17日)

2人揃って来室。今日は私と3人で輪を作り身体表現する。N、どうにか音楽に合わせてついてきた。今日は成功する。これは、この先ずっと一つのパターンとして行うつもり。

私が熱意・愛情をもってセラピーにあたれば、当然の結果としてよいもののはねかえってくることが、今日実感として受けとめられた。

U、時々大きな声でレコードに合わせて歌う。印象的であった。

第35回 (1980年 3月24日)

N休み。今日Uは初対面の普通児S（男子8歳）と一緒に行く。Uにとって相手がAであろうとSであろうと関係なしにレコード鑑賞をする。しかし、心持ちAとセラピーを行うときと、やや趣きが違う感じがある。やはりコミュニケーションの関係であろう。その他は従来の雰囲気と同じである。

今日は挨拶を課題として指導する。又、レコード鑑賞の時にステレオの前に行儀よく坐らせる。これも課題治療として、治療教育の一環である。

第36回 (1980年 3月27日)

N休み。今日はA普通児と一緒にセラピーする。

今日も積極的に音楽に合わせて身体表現する。又、大きな声で歌をうたう。日本昔話の歌曲集がいい。(花咲爺さん等)

その他、いつものセラピーと同じ。最近Uは音り療法が終了したら人形遊びをするようになる。その人形遊びの間、私がピアノ（童謡）をどんとんとB・G・Mとして聞かせている。

今日、Uのはっきりした言葉は次の言葉である。「コレをあけて下さい」「石川先生サヨウナラ」早く快くなってくれる様、祈る気でいっぱい!!

第37回 (1980年 4月10日)

今日、見学者一人あり。Uは知らん顔であるが、Nは「今日は」と話しかける。Nはこの点普通児と同様である。

今日、遊びの時いつものように輪を作って回る時、ふだんは私が入り手を取り合って回るのであるが、今日は子供同志だけで回らせた。この事は、いつも教師対子供の関係ばかりでは、将来学校適応にいい結果をもたらせないと考えた結果である。

今日、この教室を閉鎖することを母親に話したら、非常に残念がり、是非続けて欲しいと強い申し入れがあった。しかし、私の方の実情を話し、納得してもらい、今後の再会を必ず約束して了承してもらった次第である。

III 結果および考察

今回の音り療法は、音楽リズムのなかの歌う・聞く・動く・つくるの活動をその日の子供の状態により、或る時は歌を中心に、又聞く活動を中心にやるという内容である。大体においてのセラピーは、先ず聞く・動くの活動から入り、歌う、そしてピアノを私と一緒に弾くという順序であるが、何にウェイトをおくかは、その日のコンディションによる。平均的に言って聞く+動くのペアに弾く活動を入れたのが、一番スムーズに入れた活動である。

聞く活動の曲の種類は、幼稚園、幼児学級で習ってくる歌、つまり童謡・学校唱歌の2種類である。そしてリズムカルな曲になると、動きを加えて一緒に私と行動するというパターンである。聞く活動では、一人はロッキングチェアで、一人はお行儀して聞くというスタイルで各々特徴のある聞き方である。

曲に対するリクエストは、最初から中頃にかけては、こちらのかけるレコードを聞くということであるが、後半になると臨床記録で報告したように、自分の意志ではっきり曲を指定したことである。すばらしい変化と考える。歌の方も、私が一方的に決めてどんどん弾き語りで歌うのであるが、子供は興味のない歌には、ただ黙って部屋の中を走ったり、歩いたりするパターンである。しかし、その歩くテンポは曲のテンポに合わせている。そして、セラピーの15回目あたりでUは数字の歌、Nはおへんじの歌に異常な興味を持っていることがわかったのである。それ以後、子供たちがパニックを起したときは、その曲によってセラピーがたすけられたのである。つまり、その曲を弾けばたいいの場合パニックがおさまったのである。又私がある課題を出す時の導入にも、この曲を利用すればたいい場合成功したのである。又本人達を元気づける時にも返事をさせる時にも、その曲が大いに役立ったのである。

固執傾向としては、数字のつくものがあれば、自分その前から離れないのがUである。Nは部屋から見える証券会社のカンバン、つまり「山一証券」を見るとすぐに大きな声で「山一証券」と連呼する。又鏡を見

ると必ずご機嫌になる。パニックを起こせば一人には数字、Nには「山一証券」とやればパニックがおさまるというわけで、二人にとってこの固執傾向が本人自身のためにもなっている。しかし、この傾向をみだりに使うことは固執を助長する結果になるので、パニック以外には、みだりに使わないように心がけた。そして、この固執傾向はセラピーの最後まで続いたが最初の頃の傾向とはだいぶ違い、執着時間が短くなった。

次にピアノを弾く活動であるが、Uは一回毎の指導に対して、どんどん技術を習得してゆくかのごとく見られた。報告にもあるような実態である。音感も次第に確かになる。おどろくべき能力である。集中時間は最初の頃は3分程度であったが、これもだんだんと時間が長くなっていった。ピアノを弾かせるのは私がUの指先をもって一緒に弾くという要領であるが、最後の頃のセラピーでは一人で弾くという事も度々あった。一方Nの方のピアノ指導の目的は、親指があまり動かないので、親指のみで弾かせるように努めた。Nの方はUのようにあまりピアノに関心がなく、一、二分続けばよい方であった。この持続時間は最後まで変わらなかった。しかし、親指の動きは当初よりもしっかりしてきて最初の頃のように一見だらりとした親指の状態は消えうせた。この指導も効を奏した例であると確信する。

動きの面であるが、報告にピョンピョンとあるのは、子供の手を取ってスキップのリズムで大きくとびはねさせるのである。この動きはUの得意の動きで、これをやると、非常にご機嫌がよくなる。その状態は、うなる様な声でとびはねるのである。しかし、この動きは私の体がついていけない。つまり上にとびあがる時に私がおもいきり相手の手を上に上げてやらなければならないので、長く私の体力が続かない。これをやれば喜ぶ事ははっきり予測できるので、ついピョンピョンになるのであるが、これはラポートを成立させる期間には有効であるが、成立後はだんだんに止めさせるようにもって行くべきであったと反省している。私の体力の限界を無視してはセラピーも成り立たないし、又子供の固執・常同性を助長する恐れが多分にあるという反省である。

セラピーの途中、10回位で正常児をなかに入れてセラピーする。最初から二人ともAを拒否することなくスムーズに受け入れた。同じ年頃のせいなのか。しかし受け入れたとはいえ、15回ぐらいまでは少し拒否気味の様子が見られたが、回が増すごとにお互いの人間

的な触れ合いが随所に見られた。Uに至っては、リズム楽器を受け渡しする時は、ただ、だまって渡すのではなく「ハイ、コレ使ってください」とはっきりとした言葉で表現し、又セラピーが終了すれば「Aさんさようなら」と挨拶するまでに至り、統合保育が成り立つことを現実経験したわけである。障害児との統合保育は賛否両論があるけれど、一応良い結果が得られたわけである。

今回の音り療法により、レポートの設定に成功し、セラピーの最後のほうでは、セラピーが受容からリーダーシップを取るという経過であるが、治療効果は多分にあったと確信する。まず、二人共音楽に合わせて表現する動きは正常児と同様になる。また、リズム楽器で音楽に合わせることができるということである。Uは最終的にはピアノが弾ける様になりNは親指がいくぶん丈夫になる。それと平行して、数字、山一證券への固執もうすうらぎ、挨拶という日常生活の基本的習慣の課題も受け入れるといった効果は、治療保育ができることを立証したわけである。しかし、今回の事例は自閉症的傾向の対象であって、重症の自閉症児であれば、そうたやすくレポートも成立せず、治療保育が一層困難になることは、当然である。

IV 要 約

本研究は、自閉症的幼児及び児童を対象として試みた音楽リズム療法に関する臨床報告である。

対象児は、U・M（5歳児）とN・F（8歳児）の二人で、音楽リズムによるセラピーを、1979年7月から1980年3月31日までになわって30回行った。1回の所要時間は概ね1時間である。

セラピーは、歌う・弾く・聞く・動く・つくるの活動を、その日の子供の状態に応じて用いるという方法をとった。通常は、聞く・動くの活動から入り、歌う・弾くという順序をとるが、何にウエイトをおくかはその日のコンディションによった。

治療効果としては、自閉症児のもつ固執・常同性の出現頻度の減少と解消、基本的生活習慣の向上、対人関係におけるコミュニケーションの成立等が見られたことである。セラピーをはじめた頃のUがもっていた目に見える範囲内の数字に対する固執性、Nに見られた「山一證券」の看板に対する固執性は極めて強く、治療にはいるのに極めて困難な状態であったが、セラピーの中頃14、15回頃からその傾向が徐々に減少し、日によっては表われないこともあった。同様に、排尿や食事の習慣、挨拶等のコミュニケーションも著しく改善できたのである。以上の結果、一つの試みとしての音楽リズムによる自閉症的幼児のセラピーが成立することを立証し得た。この研究は今後継続して行いたいと考えているが、現段階においても、この音り療法が保育現場において役立つことを確信している。

引 用 文 献

- 1) 櫻林 仁：音楽療法入門，芸術現代社，1978，p. 13.
- 2) 小関康之：自閉症児へのダイナミックアプローチ，東京書籍，1981，p. 111.
- 3) 小関康之：自閉症児の保育と発達，東京書籍，1982，p. 84.
- 4) 飯田秀一：音楽リズム，同文書院，1979，p. 2.

Summary

This paper reports on an experimental practice of a therapy "musical rhythm therapy", which is named and has been developed by the writer through his long teaching experience in the area of early childhood education, to remedy autistic children.

The writer was motivated to develop this therapy in 1978 when the handicapped children's education became compulsory at public schools. In recent years, the number of kindergartens and nursery schools which play a leading role in the handicapped children's education is increasing. But the special education programs for those handicapped children have not been well established yet in the area of early childhood education, hence there is a confusion among kindergarten and nursery school teachers who do not have any educational background in that area. Thus the writer intends to improve the special education programs for the handicapped children and also to help the teachers in the area of special education for the future by reporting the cases of a clinical study of the musical rhythm therapy.

Disappearing of fixation or obsession and forming of better living habits, though it had been very gradual, had been observed among the autistic children who underwent the musical rhythm therapy as its therapeutic value. In one case, for example, the child was obsessed with numeral letters, hence everything which had numeral letters on it had to be removed from the therapy room. However, of course, it was nearly impossible to remove even the numeral letters on the channel of the television set in the room for each therapy. In another case, the child was obsessed with outside signs and just called out the name of the stock company "Yamaichi Shoken" whenever he saw outside signs. In both cases, however, the children started showing their interests toward the subjects which the writer assigned instead of being obsessed with numeral letters and with outside signs after they underwent a number of the musical rhythm therapies. Thus the writer found the therapeutic value of the musical rhythm therapy in both cases.

The major points of this study, the writer wants to emphasize, are as follows:

1. Teachers will be able to learn the musical rhythm therapy if they can master the basic methodology of the music therapy.
2. The principal goal of the therapies to remedy autistic children should be to help them to regain their normal relationships with people and living experiences, therefore the therapeutic value of the musical rhythm therapy should exist in improving of the children's basal living habits and competences to adapt themselves to their schools and society.